

# 令和3年度 GLEP 海外インターンシップ報告書

学部：環境人間学部

学年：3年

対象国：中国

氏名：中田右納

期間：2/28～3/31

## ● インターンシップ参加の動機

海外の文化や人に触れ、自分の価値観を疑い、視野を広げたかった。

## ● インターンシップ内容

インターンシップ先の大学で行われている授業内容に沿って資料を作成し、授業を進めた。授業は月曜日、火曜日と木曜日の週3日。月曜日と火曜日は外省クラスといって、台湾など遠方から来た人が多いクラスの授業だが、木曜日だけ内省クラスという大学近くの出身の人が多いクラスの授業であった。はじめに、担当の先生から授業資料が送られてきた。1つの単元につきA4用紙14ページほど。2週間で1単元を進めることを目安に、段落の区切り方や参考資料などを自分で考えて準備する。私の場合はインターンシップ期間が1か月だったので、2単元ほどの資料作りと授業進行を担当させていただいた。講義はオンラインで進められるため、授業資料をGoogleスライドで作成した。資料作りについても決められていることはない。インターンシップ先の大学の普段の授業進行手順を参考に「新しい単語→言語の学習→著者の説明(単元の最初だけ)→本文→関連することを違う視点でまとめたもの→次回課題」の順にまとめた。授業中は、教科書の音読や、先生や学生の方にはだく質問に解答することなど、事前の入念な準備から臨機応変な対応までを求められた。単元の終わりには毎回、練習問題があり、解答と解説を用意するが、インターンシップ先から送られてくる資料には解答などは一切載っていないので、慎重に答えを考えた。



## ● 学んだこと、得たこと

まず、自分がいかに日本語を知らないかに気が付いた。日本語を知らないがゆえに、大勢の学生の前で、間違えて恥ずかしい思いをしたり、迷惑をかけて申し訳ない気持ちにもなったりした。しかし、失敗を繰り返し、反省する中で、私自身が分からないことはどうしようもないという考えになっていっ



た。学生の皆さんは日本語で論文を書くほどの高度な語学知識を得るための学習をしている。講師のお手伝いをする立場の私はその学習に役立つ何かを発信していかなければならない。その目的に立ち返ったとき、私が恥ずかしいとか、かっこつきたいという思いが先に立ってはいけな気が付いた。それまでは「私は普段使いません。」とか「分かりません。」と言い、質問を流したりもしたが、その気づき以後はその場で調べたり、休み時間のうちに参考資料をまとめたり、暨南大学の王先生に助けを求める形で一つ一つの質問に真摯に向きあった。その中でさらに、新たな学びを得るおもしろさに触れることができた。教科書の内容も、毎回の授業で王先生に聞かれる質問も、中国人にとっては簡単で授業中はあまり触れられない熟語も、「だらけ」と「まみれ」の違いも、すべて新鮮で楽しい学びであった。

さらに、実用的な学びとして、スライドが切り替わる前に「質問はありませんか。」と一声かけることや、授業で使うスライドは段落ごとに区切るということなども学びとして得た。私は、授業をする立場としてスライドを作ったことがなかったために、初めは文字数で段落を区切るなど非常にわかりづらいスライドを作っていた。また、一方的に話してどんどんと授業を進めることもあった。毎回の授業後の反省を通して少しずつできることが多くなったと考える。

最後に、外国語の勉強の仕方のヒントも得ることができた。日本語学科の皆さんは授業に対して非常に意欲的で、毎回の授業範囲の暗唱を完ぺきにこなしていた。また、王先生がよく「言語には意味は同

様に、外国語の勉強の仕方のヒントも得ることができた。日本語学科の皆さんは授業に対して非常に意欲的で、毎回の授業範囲の暗唱を完ぺきにこなしていた。また、王先生がよく「言語には意味は同

じでもニュアンスの違いで使い方が異なる言葉が多いため例文にたくさん触れることが大切だ。」とおっしゃっていた。以上の二点から、外国語の習得において例文の暗記を繰り返すのも有効な学習方法だと分かった。

### ● 印象に残ったこと

はじめに驚いたのは、授業が全て日本語で進行されているということだ。私が学生として受けてきた外国語の授業は母国語の日本語で進行されていたため、暨南大学日本語学科の学生の皆さんの優秀さが窺え、授業代行の立場として気が引き締まった。

授業が進むうちに気が付いたのは、日本人にとって難しい言葉と中国人にとって難しい言葉は異なるということだ。例えば私にとって「漸次」や「閑暇」という言葉は触れる機会が少なく、難しく感じるが彼らは漢語を使い生活しているため、容易に理解できるようであった。一方で「甚だしい」と「夥しい(おびただしい)」の違いや「もはや」と「すでに」の違いなど、和語の理解は難しいようで、説明に多くの時間を要した。ただ、私自身も意味を明確に理解してはなかったため、成り立ちなどを一から調べ、共に学習していった。外国の方の疑問に触れる中で自国文化の理解を深めていく流れもとても印象的であった。

### ● 苦勞したこと

毎回の授業資料作りである。慣れていなかったこともあり、初めは一つの授業のスライドを作るのに3日を要した。徐々に慣れた後も、アルバイトや卒業論文、就職活動などで十分に時間を確保できないこともあり、寝る前と起きてからすぐ、アルバイトの休憩時間など、時間を見つけては資料作りをした。一番大変だったときは、始業の5分前まで資料を作っていた。その時は、引用文献や出典の明示ができていなかったために授業が終わってからでも資料作りが続く形となった。私の考えでは、資料作りは授業の要である。資料を作りながら、授業について深く理解することもあれば、疑問点が生まれ新たな資料作りに繋がることもある。そして、それらすべての下準備からしか、学生の皆さんに共有できる知識はない。準備していない質問には答えられないし、教材理解を深め、楽しみながら学習してもらうこともできない。そのため、苦勞するのは当たり前であり、資料作りが上手くいったときほど授業もとてもうまくいっていたと考える。

### ● インターンシップ参加に当たって必要な語学力・スキル

特にないと思う。授業を受ける方たちのことを考え、毎回の授業に真摯に向き合う姿勢があれば十分だと思う。

### ● この経験を今後どう活かしていくか

この経験で得たことは、上記した「自分の無知に前向きに向き合うこと」「教える立場として求められる姿勢や技術」「外国語を習得するコツ」の3つだ。もちろん、1か月という短い期間の中でこの3つを完璧に身に着けることができたわけではない。しかし、私にとってはこの概念が自分の中に生まれたことだけでも大きな成長であった。この3つの思考や知識を身に着けたことで、同年代の外国の方の前で、自分で用意してきた資料を発表することに緊張しなくなった。また、人に楽しみながら学んでもらう資料を作ることが好きになった。今後も誰かに知識を共有することや、人前で発表をする経験を重ねていき、もっと成長していきたいと思う。さらに、得たことの3つ目である「外国語を習得するコツ」は実験的に自分自身の学習に応用していきたいと思う。

また、私のインターン参加の目的であった「海外の文化や人に触れ、自分の価値観を疑い、視野を広げたかった」ことについてはオンラインであったこともあり、思っていたようにはいかなかった。しかし、派遣先の学生の皆さんと連絡先を交換することができたので、インターン参加の目的を今後も継続して達成していきたい。

### ● 後輩へのメッセージ

私は、インターン参加の際、背伸びをしているような気持ちだった。気を張りすぎて少し無理をすることもあった。結果的にインターンの準備として「絶対にやっておくべきこと」は特になかったが、インターン決定から開始までの4か月ほど、忙しい中、中国語の勉強をしようとして上手くできずに落ち込んだりもした。

いざ、インターンが始まると、内容が思っていたよりも楽しく、また、楽ではないが難しくもない仕事であった。背伸びをするというよりも、前に進むといったイメージで日々を過ごせた。参加する前は自分になんかできっこない、外国は怖い、挑戦は怖い、と逃げ腰だったが、終わってみれば、次は1人で海外に行ってみたいと思うほど、恐怖心を克服できていた。

もし、挑戦しようか迷っている人がいれば、挑戦すべきだと思う。怖がりな人や考えすぎて行動に移せない人、緊張しいでいつも負担に感じる人が多い人も、今の状況を変えるにはまず行動を変えるしかないと思うので、兵庫県立大学に入学し、海外インターンシップの情報を知ったこのいい機会に、是非、いずれかのインターンに参加してみるといいと思う。私は、中国の暨南大学のインターンしか知らないが、暨南大学には王先生という優しくてユーモアのある先生と真面目で意欲的な学生がいて、学ぶことも多いのでおすすめする。

以上